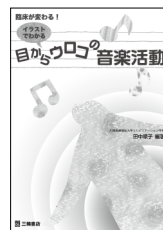


田中順子（編著）

臨床が変わる！ イラストでわかる 目からウロコの音楽活動

岩 崎 清 隆

（特定非営利活動法人「ぶねうま群馬」，作業療法士）



「死ぬということは、もうモーツァルトが聴けなくなることだ」と言った人がいたそうだ。真偽のほどはわからないが、アインシュタインの言葉だそうだ〔吉田秀和，他（編）：モーツァルト頌，白水社，1995〕。いずれにしてもモーツァルトを楽しまなければ，人にあらず，生きる価値もなしといわんばかりの，すさまじいモーツァルトへの傾倒振りである。音楽がそれほどまでに人の生を充実させるものならば，それを日々の日常の中で使わない法はないということにもなる。実際，仕事における精神の高揚を，音楽に求める人の話をよく聞く。故黒澤 明監督は，朝から晩まで武満 徹の「ノヴェンバー・ステップス」をかけながら，あの「生きものの記録」の構想を練ったそうである（野上照代：蜥蜴の尻っぽーとっておき映画の話，文藝春秋）。百田尚樹は涙をボロボロ流しマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナの間奏曲」を繰り返し聴きながら，『永遠の0』の最終章を脱稿したらしい（百田尚樹：至高の音楽 クラシック 永遠の名曲，PHP 研究所）。そうなれば当然，病者や高齢者，障害のある人の症状や機能不全の改善を求めて，音楽を使ってみようという人が出てきても不

思議はない。これが治療行為としての音楽療法の原点といってもよからう。

本書の編著者はOTであるが，本書はその音楽療法への格好の入門書といえる。

人さまに何とか聴かせられるような歌や演奏ができるようになるだけでも，相当の修練が求められることは容易に想像がつく。ましてや不安定であったり，心が閉じたりした状態にある病者に即応しながら，和音構成，転調，時に即興というような当意即妙な素材の操いができるようになるためには専門的な音楽教育を受ける必要があるかと思われる。音楽療法の隘路^{あいろう}はまだある。本書によると，音楽療法士は国家資格ではなく，またそうなる可能性も限りなく小さいという。それだけの技量を備えていながら，現場では介護職なみの待遇だというのは，何とも理不尽な話であるが，それが現実らしい。

しかし本書の著者らは，専門的な音楽療法はそれとして，それなりの技量で音楽活動を治療手段として用いる〈ヘルス・ミュージックキング〉という領域を提案している。音楽は誰でも好きな素材である。また高度成長期以降に生まれたOTには音楽的素養のある

者も少なくない。音楽活動を手段の一つとして治療活動を行う職業としては，作業療法は最も近い位置にいる。それは作業療法にとっても，新しい風を受けることでもあり，前途多難な奔流の音楽療法にとっても，新たな地平が拓かれる可能性を秘めることでもある。

本書の編著者は，演奏家から転身されたOTとうかがっている。音楽技量をもちつつ，病者のもつ症状の分析，解釈，治療に習熟したOTとしての訓練も受けている。したがって本書の著者には芸術の地平を見通しつつ，自ら音楽療法の最前線に立ち，それに続く若い療法士を鼓舞するという，さしずめ中隊長のような役割を期待したい。〈ヘルス・ミュージックキング〉の症例集のようなものが10年後，15年後にできることを期待している。

とまれ本書は音楽活動を治療手段，指導手段，介護手段として使いたいと考える人にとっての必携の書であるとともに，そういう希望を育てる書でもある。

〔B5判 216頁 3,200円＋税〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357